

松村赳・富田虎男編著『英米史辞典』

鵜月 裕典

本書のずっしりとした手応えには、しばし言葉を失った。本文八五〇ページ、付録七二ページ、索引二一九ページにおよぶ大著である。それを、松村赳氏・富田虎男氏のお二人の著者が一〇年をこえる歳月をかけて丹念に書き下ろしたという。「初めて登場したイギリス史・アメリカ史の辞典」と帯にはうたわれている。いわれてみれば確かに類書の存在は知らない。英米史というタームには妙な座りのよさが備わっているけれど、実際には、かなりの相違がある。地名の発音はもとより、政治制度や法律など慎重さを持つてのぞまないと足元をすくわれる。われわれが『固有名詞英語発音辞典』(三省堂)や『英米法辞典』(東京大学出版会)を必須の参照文献としているのもそのためである。本書のずっしりとした手応えは、今後は英米史研究の分野でも心配はいらない、という無責任な安堵感のあらわれなのかもしれない。

史苑(第六一卷一号)

しかし、広く世間一般や後進の研究者に寄与するためだけに、編者は一〇年以上もの歳月をついやしたのではなからう。およそ辞典は読書の対象ではないのだが、評者がしばし本書を「読書」したのは、この理由にふれたかったためである。ただし評者はアメリカ史を専門とするので、アメリカ史中心の指摘となることはお許しいただきたい。

本辞典の執筆意図は「まえがき」に記されている。まず、後進の者に「回り道や徒労」を避けて能率的に英米史研究にあたらせたい、という長年にわたり英米史研究をリードしてきたお二人の深い配慮である。しかし、本書を産んだのは研究技術の能率化という目的よりも、お二人の現在認識に深く係わっているようである。お二人が本辞典の執筆に要したこの一〇年間は、英米が「仰ぐべき模範」の座から降り、冷戦終結後に民族・宗教対立が激化し、アメリカが理想や規範を捨ててヘゲモニーの維持に必死となった(イギリスがそれに追随した)転換期である。こうした混乱の時代を見据えるには、英米の歴史を学ぶことが過去にもまして必須の作業となるのではないか、そうした判断が本辞典を編む最大の動機となったというのである。

本辞典には英米史上の政治・経済・社会・文化など四五〇〇をこえる項目が、アルファベット順に配列されており、信

頼に足るものである。同時に評者が本辞典の特色として着目したのは、先住民へのこだわりである。編者の一人である富田氏がわが国におけるインディアン史研究のパイオニアであるのは周知の事実である。通例、彼我のアメリカ史辞典でインディアンの占める比重は軽い。また概説書の本格的叙述も、一七世紀の白人移民期から始まるのが普通である。最新の權威ある二冊の通史の年表を見ても、九八六年（ノースマンのグリーンランドの植民地建設）と一四九二年（コロンブスの西インド到達）をそれぞれアメリカ史の開始点としている。それとは対照的に本辞典の年表は、モンゴロイドのベリンジア通過（一五〇〇年以前）をもってアメリカ史の開始としている。つまりインディアンの祖先の移動を出発点として、西半球の人類史をトータルに把握する必要性が主張されているように思えるのである。さらに索引で確認すると、本辞典ではインディアン関連事項が三〇〇点近く言及されている。このうちインディアン部族への言及は九五と約三割を占める。先史時代に関する項目も部族に係わる項目も数・内容の両面で歴史辞典の常識をはるかに越える充実ぶりであり、政策史やインディアン文化についても行き届いた目配りがなされている。

本辞典は英語表記が完備しており、見出し項目以外にも収録した英和索引が整っていて誠に便利である。それだけに、

領域別（テーマ別）索引が整っていればという気がする。項目間の関連性が密であるだけに、系統的に読める辞典として活用してみたいという誘惑にかられるからである。

ただしインディアン以外の民族集団について、アフリカ系アメリカ人については充実しているものの、望属の嘆とはいえ、これら以外の民族集団については項目数・内容が小さいのは残念である。イギリス史でもケルト人やアイルランドやウェールズ関連項目が充実しているだけに惜しまれるのである。多少穿った意見かもしれないが、本辞典のいくつかの項目からは、近代国家の成立・性格を照射し直す意図をくみ取れるように感じられるからである。

なお、本辞典では英米史上で同一の表記をするものについては、英・米でそれぞれ説明が分割表記されていて便利である。たとえば「産業革命」や「大内乱／南北戦争」、プロテスタント諸教会に関する項目など、講義用教材としても使いたくなる。ただし、たとえば評者が関心を抱く「警察」や「州長官・州知事」（米国史では法執行官・保安官にあたる）の項目に、制度史研究の蓄積の差の反映であろうか、アメリカ史側の解説がないのは残念な気がする。我が儘ついでにもう一言。本辞典は史学史についてはあえて禁欲的なように思える。しかし、一九七〇年代以降のアメリカにおける社会史研究の隆盛が英米の歴史家の交流をひと

つの端緒としたことも考えれば、史学史を巡る項目がもう少しあっても良かったように思う。

ともあれ本辞典は、次世紀に向けて英米史研究それぞれがいかなる方向を探るべきか、多様なヒントを提示してくれるように思われる。もっともこの点こそが、編者による本辞典の最大の執筆意図なのかもしれないが、最後に雑駁な印象を書き連ねた非礼を深くお詫びするとともに、本辞典を共有できる慶びを確認しつつ拙評をとじたい。

(研究社、二〇〇〇年一月、一二、〇〇〇円)

(本学教授)